

● 優秀賞

学ぶ意欲を育む社会科授業の創造 —— 郷土を開く「品井沼の干拓」 ——

宮城県仙台市立松陵西小学校 みうらかずみ
三浦和美

1 はじめに

平成13年度転勤で現在校に勤めることになった。本校は仙台市の北部に位置し、「県民の森」に続くなだらかな丘陵地帯に開かれた新興の住宅地にある。

4年生の社会科「郷土を開く」の単元では（水田を身近で見たことがない、稲作のことにも関心が低い）平成生まれ・平成育ちの子どもたちと干拓のことを学ぶことになった。

「子どもたちはどんな学びができるのか」学ぶ意欲を育みながら社会科の授業を展開していきたいと考え、本研究に取り組んだ。

ここでは、「郷土を開く」で、400年にわたって干拓を続けた「品井沼」を取り上げることにした。また、4年生の副読本『わたしたちの宮城県』（平成13年度版）のこの単元を筆者が執筆したことも生かしていきたい。

2 研究の視点

学ぶ意欲を育む社会科授業の創造のために次の5つの視点から実践する計画を立てた。

① 学習形態の多様性の工夫

品井沼干拓の歴史は長く、内容的にも複雑なため、問題意識を高めたり、追究の意欲を持続できるようにするために、学年全体の学習場面を増やし、見学までもっていくようにする。まとめの段階はクラス中心にじっくり発表会を行うなど、学習形態の多様性を工夫しながら、この単元の実践を行うようにする。

② 副読本の効果的活用とワークシート作成

事前の学習と見学での調査活動が結びつくように、副読本をベースにしたワークシートを作成する。「予想を書く」「色ぬりの作業をする」「理由を考える」等、子どもが主体的に取り組める内容を入れて構成する。

また、見学の感想やメモが書けるスペースも作り、これまでの学習のことを参考にしながら調査活動ができる支援とする。

③ 地域性を生かした見学活動の計画

鹿島台町では干拓事業を後世に伝えるために排水路やずりだし穴などの見学地整備に力を入れたり、鎌田三之助村長の偉業を伝える「鎌田ホール」を建設している。こうした見学地を十分に活用し、副読本だけでは味わえない「実感のともなった」学習ができるように計画する。そのため事前に下見を行い、有意義な活動が組めるよう教材研究を行う。

④ 表現活動の重視

学習をして分かったことを自分で選択した表現方法でまとめるようにし、その時の活動を振り返った「表現活動アドバイス帳」を作成し、次回の活動の参考にしたり、他学年への情報として生かせるようにする。発表会後の作品は廊下に掲示し、学級間での交流の場となるように計画し、表現活動の良さに気づくことができる手立てになるよう支援する。

⑤ 保護者への授業公開

本校は普段の教育活動を保護者に公開することで「共に」子どもたちの教育を進めるという姿勢がある。4年生でもこの「品井沼の干拓」の授業を保護者公開することで、さら

に子どもたちの学ぶ意欲が高まることを期待した。参観に来た保護者にもワークシートを配付し、授業に参加してもらうようにする。

3 指導計画 郷土を開く 「品井沼の干拓」

単元の目標：品井沼干拓の様子や鎌田三之助の働きや開発に対する考え方などを資料や見学を通して具体的に調べ、郷土の開発に尽くした先人の働きや工夫について理解できるようにする。

時	学習内容	主な支援 ★ワークシートの内容	形態
1	400年前にタイムスリップしよう (品井沼干拓への導入) 品井沼はどのようにして美しい水田に変わったのだろうか。	○現在の品井沼と昔の地図を比較し、品井沼干拓への関心を高める。 ★沼をどのようにして田んぼに変えたいか自分の考えを書く。 ○いくつかの意見を発表させ、意見を交換させる。	学年 全体 ↓ 学年 全体 ↓ グループ ↓ グループ ↓ 学級 ↓ 学年
2	元禄排水路工事について ずりだし穴、くぐり穴	★くぐり穴の長さや工事の道具の使われ方を予想する。 ○工事の犠牲になったおまんの話をする。	
3	明治排水路工事について 煉瓦製の排水路入り口	★元禄排水路との比較、沼の広さの比較をし、干拓の進み具合を実感する。 ○写真を基に工事の大変さに気づかせる。	
4	わらじ村長（鎌田三之助）について	★三之助の銅像のクイズを解く。	
5	衆議院の職を捨てて干拓事業行う	○申合規約を読み、三之助の願いについて考えさせる。	
6	吉田川の改修とその工事 川の立体交差、サイフォン	★川の立体交差の写真に名前を入れたり、水田や川に色ぬりをする。	
7	見学事前指導	○見学地で「見たこと」「考えたこと」をメモするよう話す。	
☆	品井沼干拓地見学 元禄排水路 ずりだし穴 閘門（鹿島台小校門）見学車中より 鎌田記念ホール（映画鑑賞） 吉田川サイフォン（土手で昼食） 明治排水路	(学校行事で5時間) ★各見学地のワークシートにスケッチや文で記録をする。 ○授業で勉強したことをワークシートを見て思い出すよう促す。 (地理的位置、時間感覚の確認)	
8	見学のまとめ	○新聞・紙芝居・模型・本・ペープサート等の方法や自分で考えた方法から選択してまとめるように助言する。	
9	自分で選択した表現方法でまとめる		
10			
11	品井沼の干拓発表会（授業参観）	○感想を保護者にも記入してもらう。	
12	学習のまとめ・表現アドバイス帳作成	※課外として作品の交流を行う	

●資料1/指導計画（12時間扱い 11月～12月）

4 研究の実際

4年生の社会科では、9月に入り、県全体の様子を学習する。それまで市の学習が中心であったことから考えると、視野の広がりが出てくる時期である。仙台市内にも干拓の学習ができる場所がいくつかあるが、県という視野を広げていくためにも「品井沼の干拓」を選んだ。品井沼は仙台市から北東約30キロにあり、現在では美しい水田が広がる。鹿島台町は水害に強い町作りを目指している。

(1) 導入

子どもたちに事前アンケートを取った結果、「品井沼」や「干拓」は全く分からない状態だった。また、学区内に水田がない地理的条件、保護者の多くが公務員や会社員といった生活条件で、「水田をどのように作るか」といった問題追究を意欲的にできるか、授業を行う前は不安な気持ちが大きかった。

しかし、この学習が始まる前の9月11日、台風による臨時休校があった。高台にある本校は被害はなかったものの、台風や雨の被害の大きさにはテレビ等を通して関心があったので、そのことをきっかけに授業を始めた。「雨がすごかった」「川があふれたところもあったよ」と意見を出してきた。そこから水田が広がる現在と大雨がふるといつも沼の水があふれた昔の品井沼の比較を始め、その沼を水田に変える方法を考えさせ、導入とした。



●資料2／江戸時代のころの品井沼のようす

この時、「鳴瀬川まで掘って流す」「松島湾まで掘って流す」「川をたくさん掘る」等の意見が出てきた。子どもたちは模造紙に自分の意見を書いて、堂々と説明をしていた。学年全体での授業だったが、クラスの枠を越えて意見をお互いに聞き合う姿勢が自然にできていたのは、授業をしてみたの驚きだった。



●資料3／沼の水を流す方法の発表

いろいろな意見を十分聞いてから、実際に行われた方法を伝えると、「自分の考えが当たった」「そうだったのか」の声が上がった。

沼の水をぬくために「ずりだし穴」を掘り、ずりだし穴をつなぐ「くぐり穴」を作ったことを写真や図を使って説明した。ずりだし穴の高さが16mで校舎よりも高いことを知ると、また歓声が上がった。その後ワークシートで「元禄排水路の長さ」を予想させたところ、「人が掘るんだから100mくらい」という意見が多かった。くぐり穴の全長は2,578mである。ずりだし穴といい、くぐり穴といい、昔の人の努力に子どもたちは圧倒されるばかりだった。

次に、工事に使われていたと考えられる道具の絵から「どんな仕事をしたものか」を想像した。実物を探す努力をしてみたが、外部に出ていかないと見ることができないため、授業では絵のみの説明になり残念だった。資料の少なさもあったものの、導入時の子どもたちの意欲は高く、授業の後で「どんな所か見てみたい」と話しかけて来る子どももいた。

(2) 品井沼干拓の歴史に触れて

400年の干拓の歴史を限られた時間で伝えることは難しい。さらに、歴史という時間感覚も十分育っていない子どもたちに「江戸時代」を想像させることは困難であると考えた。そこで、4mほどの年表を作り、それを開く時「今からタイムマシーンに乗るよ」と声をかけ、興味を引きつけるようにした。



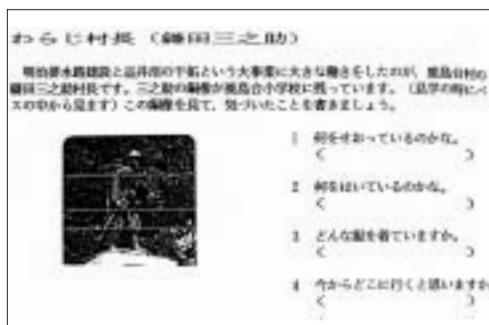
●資料4/干拓の年表

紙製のタイムマシーンだが、子どもの想像力を刺激するアイテムになった。明治排水路は江戸時代のものとは比較にならないほど、大きく立派なものだが、工事風景の写真の中にはたくさんの事実が隠されていた。写真の読み取りの中で「立派なコートを着ている人がいる」「自分たちより小さい人が働いている」「道具は昔のと変わらない」等たくさんの意見が出た。工事を指揮する人との服装の違いや工事の厳しさ、その工事を人の手で進めていることをつかむことができた。

以前この実践をした時は外階段のある学校だったので、「砂袋をかついで登る」体験活動を行ったが、今回は外階段がないので見送った。しかし、実体験として校庭でやってみる等の活動があればもっと仕事の大変さを実感として捉えることができたかもしれない。初回保護者の参観は3名だったが、「とてもいい勉強になるからって誘われたんです」と人数が増えてきた。そのことは子どもたちにとっても学習の意欲につながるものになった。

(3) わらじ村長三之助との出会い

「銅像の人が背負っているのは何かな」とクイズ形式で三之助の様子を調べることにした。ごぎ・わらじ・かさ・つぎはぎの服。一体この人は誰だろう。村長だと伝えると、「ええ、うそだよ」と反応が返って来た。確かにえらい立場の人には見えない。しかし、この人の働きを抜きにして、干拓の歴史は語れない。当時衆議院議員だった職を捨てて、無給で村長になり、県庁から来た役人に「こづかい」と間違われ、たばこを買いに行かされたという逸話がある。この三之助との出会いは強烈だった。貧しい身なりをした人物が干拓を押し進めていったことを年表で読み取っていくにつれ、子どもたちは三之助のファンになっていった。後にまとめの段階で三之助をテーマにしたものが圧倒的に多かったことから、いかに子どもたちが三之助に底知れない魅力を感じていたのかがわかった。



●資料5/わらじ村長とクイズ

そして、この単元を通して、具体的な人物の登場が子どもたちとこの時代とを結び大きな要因になることに気づかされた。元禄時代犠牲になった16歳の「おまん」や村人を説得して歩いた「わらじ村長」が道案内人となって、干拓の困難さやそのために努力を惜しまなかった人々がいることを子どもたちに教えていったのである。こうした学習は子どもたちの生き方にも結びついていくと思われる。

(4) 見学の様子

昭和に入ってから工事の学習が終わって、いよいよ実際の見学に出かけることになった事前指導の段階で、子どもたちは「早く見てみたい」「三之助の銅像を見たい」と口々に話しかけてきた。保護者からは「一緒に見学に行きたいくらい」と申し出があった。

学校から出発して30分ほどで広い水田が見えてきた。最初に見学したのは「ずりだし穴」で、大きさは子どもたちの想像以上のもので、「こんなに大きいのか」「掘るのは大変だったろうね」と歓声が聞こえた。



●資料6/ずりだし穴の見学

おまん地蔵の見学では子どもたちから声はなくなった。おまんの犠牲は事実としてあったことを花や供物が物語っていた。コンクリート製の小さな祠は建て替えられたものだという説明書きがあった。そこでその祠をスケッチし、次のような感想を書いたA子がいた。

このじぞうを見てそなえものがいっぱいありました。やっぱりおまんさんはいたんだと思いました。おまんさんはすごい人だと思います。いちょうもきれいで、おまんさんもよろこんでいると思いました。

このA子は、次に見学した工事供養塔の所でも2,000人が犠牲になったことにも驚きをもって感想を書き留めていた。

昔と風景が変わっていないと思われるその

場所を見て、「先生、こんな所に住んでみたいな」と話しかけてくる子どももいた。車中から水害の時に使われた「閘門」や三之助の銅像がある鹿島台小学校前を通った時は「いいな、この学校に通いたい」と言った子どもが多かったのには驚かされた。自分のこととして品井沼を考えていることを知った。



●資料7/三之助の服装見学

次に行った鎌田ホールでも子どもたちは意欲的に活動した。特に、三之助の着ていたつぎはぎの服には関心が高く、事前に学習したワークシートをもとに熱心にメモしている子どもが多かった。三之助の生涯をアニメにした映画の鑑賞も子どもたちには三之助を身近に感じるのに役立った。



●資料8/明治排水路見学(出口)

広い水田を見ながら昼食をとり、明治排水路の見学を行った。「もう時間だよ」とせかすほど、どの子どももメモに熱中していた。

5 研究の考察

(1) 学習形態の多様性の工夫

学年全体—グループごと—学級全体といった学習形態を単元の構成に合わせて組み合わせることで、子どもたちの学ぶ意欲を持続させ、最後まで問題意識がとぎれず学習を展開することができた。学習前は全く興味関心のなかった品井沼や干拓のことを保護者に対しても堂々と説明できるまでになった。体験活動や実物の掲示も充実できると、さらに意欲が高まる学習展開になると思われる。

(2) 副読本の効果的な活用と

ワークシートの作成

副読本をベースにした「予想を書く」「色ぬり」などの作業は、子どもたちも集中して取り組むことができ、意欲の持続ができた。



●資料12/ワークシート

これまで見学のしおりは見学地とメモ欄で子どもたちはどこの見学をしているのか分か

らないという反省から、このワークシートを作成した。見学時に学習を想起し、見学地の地理的感覚・見学場所の歴史的空間感覚を確認しながらメモすることができ、子どもの学ぶ意欲を高める支援としては有効だった。

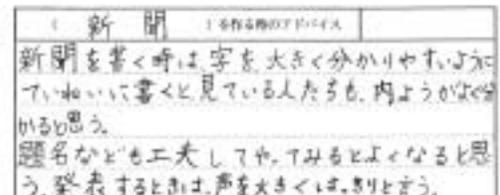
(3) 地域性を生かした見学活動の計画

鹿島台町での干拓地の見学地はとても整備され、小学生でも十分理解できるものになっている。特に、鎌田ホールの利用は今回が初めてだったが、「百聞は一見に如かず」の言葉通りの説得力があった。見学地を仙台市から広がった地域にしたことも子どもの視野を県へと広げていくのに役立った。

(4) 表現活動の重視

子どもたちは多様な表現方法でまとめ、発表し、保護者とも交流することができた。その成果を各自「表現活動アドバイス帳」に書いて残すことにし、次回への橋渡しになるようにした。また、廊下に作品を展示したので、学級を超えて見合ったり、感想を話し合ったりする姿が見られた。

社会科 表現活動 アドバイス帳
 今回の見学の干拓地についていろいろな表現方法を使って発表しました。今度はこんなことをしてみたい。次回はまた同じようなことには戻してみたいのと話していることでしょうか。そこで、みんなで「アドバイス帳」を作って、今後の学習をやる時参考にしてみようと思います。たくさんアドバイスをお願いします。



●資料13/表現活動アドバイス帳

(5) 保護者への授業公開

本校に転勤するまでは参観日の経験しかなかったが、各学年で積極的に授業を公開する姿勢に圧倒された。自分でもこの単元で授業を連続して公開することにした。初回は3名だけだったが、「大人が勉強してもおもしろい」と評判になり、連日参観者が増えていったのには感謝するばかりだった。最後に感想をいただいた時に、この団地に多くの県から

転入して来ていることや子どもの頃習った勉強を思い出して子どもと話し合った様子などが分かった。特に、「大潟村」や「安積疎水」のことを書いてくれた保護者がいたので、事前にこうした情報が分かっていたら「コミュニティ・ゲスト」として、各地方での干拓・開墾の様子を教えていただくという展開も可能だった。次回実践の時に生かしていきたいと思う。



●資料14/学年便り

「3クラスでも集中していたので安心しました」「授業に来ていて男の子のお母さんと話ができ良かったです」「先生が本を書いているからこんなに詳しい勉強ができたんですね。先生方も自分の専門分野や得意なことをどんどん出して欲しい」と保護者からお便りや話を伺う機会がたくさんあった。

保護者に授業を公開することは単に子どもの様子を見に来ることに止まらず、子どもと保護者、保護者同士、そして、保護者と教師同士のよりよい関係を構築していくことに大

変有効であることを実感した。

6 おわりに

わたしたちの生活は快適で恵まれている。ごく当たり前で「恵まれている」ことにさえ気づくこともないのかもしれない。この単元の学習が終わった時に、「自分たちの仙台が品井沼の干拓で頑張った人々のおかげで今このように立派なものになっているんだ」という意見が出てきた。つらい思いをした人々、大変なことを最後まで頑張りぬいた人々の上に立っている「豊かさ」なのだということを4年生らしい感性でとらえることができた瞬間だった。

この副読本の編集に携わって10年。「品井沼」は現在に生きる子どもたちと昔の時代をつなぐ貴重なタイムマシンの入り口なのかもしれない。今美しく整備された水田や吉田川を見て、それが400年をかけて人の手で作られたものであることを理解することは難しい。だからこそ、小学校における開発単元の学習の重要性がある。そして、ここで学んだことが子どもの生き方に結びついていくことを願っている。

学習の展開をさまざまに工夫し、子どもの学ぶ意欲を育む社会科授業の創造をこれからも地道に研究していきたいと思う。